

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520577

研究課題名(和文)

木曾三川流域における歴史災害の地域環境史的研究

研究課題名(英文)

Historical Study of the Disaster and Environment in the KISO River basin

研究代表者：

羽賀 祥二 (HAGA SHOJI)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：30127120

研究成果の概要(和文)：

本研究の成果は、第一に、濃尾地震について、被害地域の行政機関の取り組み、救済・復興過程における社会的公正さが議論されていたことを、地域史料・新聞を史料として使い明らかにした。第二に、災害罹災者救済、死者の慰霊に関する研究では、木曾三川流域や濃尾震災被災地をフィールド調査することを継続的に実施し、慰霊碑・記念碑を確認することができた。第三には、仏教教団の影響力が根強い地域で、キリスト教団体の救済活動に対抗しつつ、仏教系諸団体が積極的な救済活動に取り組んだ様子を、仏教雑誌『明教新誌』の明治20年代の記事を網羅的に抽出し、明らかにする端緒を得たことである。

研究成果の概要(英文)：

The result of this study includes the next point. Primarily, in the article about the earthquake "濃尾地震", I considered damage and revival in Aichi and examined the action of the administration, an argument about the social fairness in relief, the revival process. Second, I carried out the investigation into relief of disaster afflicted people and memorial service of the dead person and was able to discover some memorial service monuments, monuments. Third, I became able to elucidate that a Buddhism religious community worked on active relief activity by searching an article of magazine "明教新誌".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：日本近代史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：木曾三川、濃尾震災、歴史災害、災害記念碑、地域環境史、治水事業

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで東海地域、木曾三川流域を対象として、近代地域社会の研究に取り組んできた。この地域の近代史研究の遅れを実感し、歴史遺蹟の再発見と地域の歴史意識の活性化、郷土史研究の担い手とその成果、

蓄積、名古屋の産業都市化と博覧会・歴史祭典、明治時代の治水事業や治水家の顕彰運動、1891年の濃尾地震の研究などを進めてきた。本研究ではこうした地域研究をさらに推し進め、特に災害と地域社会、地域行政機関の対応についての検討を行うことを計画した。

木曾三川の災害史・治水史については、戦前に編纂された『岐阜県治水史』が現在に至るまで研究史の中心に位置する。戦後には『岐阜県史』、『木曾三川—その流域と河川技術』、『木曾三川治水百年のあゆみ』によって、歴史的・技術史的研究が積み重ねられてきた。こうした諸研究を前提として、本研究では木曾三川下流域をフィールドに、明治時代中期の河川改修事業や治山政策・事業に関する研究を進めてきた。また、1891年に起きた濃尾震災については、地震の事実と被害（特に死者）などは、供養塔・供養碑・記念碑・記念堂・記念祭などの形を取って、後世にその記憶は残されていく状況を調査してきたことを踏まえ、地震関係史料の収集と分析を進めることをめざした。この地域の災害は19世紀後半期、より深刻な様相を見せるようになり、明治20年代に木曾三川の洪水は未曾有なものとなった。また1891年には死者7千人を超える濃尾震災が起きた地域でもある。いわばこの流域は明治20年代に連続して洪水や地震に襲われた特異な地域として、また大量の犠牲者を出した地域であり、この地域を対象として災害に対する近代行政や地域共同体・住民の対応、地域共同体の再生の様相、災害に関する歴史意識や犠牲者への追悼のあり方など、広範な問題を考察したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は19世紀日本における歴史災害（地震・洪水）や山崩れ・「はげ山」などの山林問題、また防災や環境の保全を図る治水・治山政策を素材にして、歴史災害や環境問題がどのように地域共同体を変容させ、また文化的・民俗的な特質が地域に刻印させたのかを課題として掲げた。こうした災害と社会に関する広範な問題は一挙には解決できないが、本研究はフィールドとして木曾三川流域を選んで、こうした諸問題の検討を行うことを目的として掲げた。この流域は木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）とその支流として中小河川から構成されるが、近世以来たび重なる洪水や山崩れなどの深刻な災害、この地域の主要産業であった陶磁器産業用の材木伐採による「はげ山」問題などを生みだしてきた。この川と山における災害は19世紀後半期、より深刻な様相を見せるようになり、明治20年代に木曾三川の洪水は未曾有なものとなった。また、1891年には死者7千人を超える濃尾震災が起きた地域でもある。いわばこの流域は明治20年代に連続して洪水や地震に襲われた特異な地域として、災害に対する近代行政や地域共同体・住民の対応、地域共同体の再生の様相、災害に関する歴史意識や犠牲者への追悼のあり方など、広範な問題を考察することをめざした。

この19世紀後半期に現出した木曾三川流域における歴史災害は、徳川時代から明治政府への過渡期に当たり、近世領主権力による治山・治水政策が解体され、ようやく明治政府の政策が実施に移されようとしていた時期に当たる。この政治権力の交代という時期に際して、治山・治水政策の空白が生まれたはずであり、その空白期に地域共同体や治山・治水指導者がみずから対策・構想を立てつつ、重要な活動を組織していったと推測した。近世的な治山・治水体制が西欧の治山・治水の知識や技術を取り入れながら明治政府の政策へと転換していく過渡的時期に、地域社会が自立的に治山・治水の課題を解決するために経験的知識と技術、共同性を発揮したと考えられる。治山・治水の知識と技術をめぐる近世と近代、そして地域社会の三者を比較しつつ考察できる地域である。

さらに、近代の治水・治山政策が緒に就こうとしている時点で、濃尾震災が起きたことにより、その政策や地域社会にどのような影響をあたえ、どのように政策が変化したのか測定することができる。19世紀後半の木曾三川流域の歴史災害が近代地域社会をいかに作りあげることになったのか、近代地域史の事例研究として大きな意義があると考えた。

3. 研究の方法

本研究は19世紀木曾三川流域における洪水・治水・治山・地震を調査のテーマとして、防災・自然再生・歴史災害について実践と経験の諸相を解明する。この研究に当たっては、地域に眠る諸史料を愛知・岐阜県下の資料館・図書館の調査を通じて発掘しつつ、この課題を解決する糸口にした。こうした基礎資料の収集と分析によって、定評ある『岐阜県治水史』や『岐阜県史』などの記述は再検討しつつ、上述の研究目的を実現したい。

この研究に当たっては、「地域環境史」という枠組みと環境再生の歴史学の構築を目標とする。自然・環境と人間との関係性を新たな視点から再検討するために、歴史地理学の立場から溝口常俊は、「地域環境史」という概念を提唱している。溝口は山や川、平野、海、島などさまざまな自然環境のもとで、住民がそこを基盤として、あるいは他地域との交流や葛藤を通じて、生業を営み、精神生活を作り上げながら、地域の歴史を形づくってきた過程を明らかにしつつ、自然環境と人間生活史、環境と地域社会、自然と人間との対立と調和といった問題群を、総合的に再構成するために「地域環境史」という方法を提案している。申請者もこの「地域環境史」という概念はきわめて重要であると考え、19世紀の木曾三川流域をフィールドにこれらの問題群を考察する。

本研究では「地域環境史」とともに「災害

文化史」という領域を構築したいと考える。治水をめぐる地域社会の歴史意識と顕彰活動、災害犠牲者の慰霊活動、災害に関する伝承・信仰と災害の記憶について、研究を進めてきた。本研究もそれをさらに深めることに努め、災害に関する民俗学的研究に学びながら、「災害文化史」という領域を構築する。

研究を進めるために、まず岐阜県歴史資料館・大垣市図書館・岐阜市歴史博物館、愛知県公文書館などにおいて、濃尾震災及び1890年代の水害関係史料を収集する。これらの資料館において未発掘の資料が多く存在していることは、これまでの調査で確認しており、地域災害資料の発掘に努める。また、災害の後には多くの災害見聞記、写真集、災害記録が刊行され、濃尾地震に限っても「地震本」とも呼ぶべき類書が確認できる。こうした「地震本」の収集と分析とを進め、当時の災害情報がどのように集積され、報じられていったのか、またそこに盛られた情報がどのような性格のものなのかを検討する。

また、岐阜県及び愛知県内における災害記念碑・供養塔・慰霊碑については、すでに相当数のものを調査し、災害の状況や復興過程を知りうる重要な史料であることを確認してきた。この記念碑については調査を進めて、災害記念碑・供養碑研究の領域を作り上げる。こうした石造物はまた、災害に対する地域社会の宗教的・民俗的対応や、地域社会が災害の記憶をいかに後世に伝えようとしたのかという、災害文化史的な課題を解決するための分析対象となる。

4. 研究成果

本研究の成果は、第一に、この地域における歴史災害の様相を検討するための基礎資料として、愛知・岐阜両県の自治体史における歴史災害関係史料を収集し、諸史料の現存状況とその概要について、おおよその理解することができたことである。愛知・岐阜両県においてこれまで刊行された自治体史に所収の資料、自治体史の記述について悉皆調査を実施し、該当部分の複写、資料リストの作成によって、各市町村における被害・復旧の様相をつかむと共に、所在史料のおおよそを確認することができた。この所在史料の確認によって、今後の史料調査の基礎を作ることができ、今後は各市町村に赴いて史料の確認調査と収集を実施することが可能となった。これまでの東海地域の災害研究は災害復旧の過程について本格的に明らかにすることができなかったが、愛知・岐阜両県の復興過程を明らかにすることができる史料の所在をつかみ、今後の調査の手がかりを得たことは成果であった。なお、尾張西部・北部の濃尾地震後の復興の様相については論考を発表し、社会的公正さや義捐行為の意味を明らか

にすることができた。また、明治期の災害については、木曾川に合流する岐阜県かを流れる飛騨川の災害関係史料（『白川村河岐島組文書』）を購入することができ、その目録を作成するとともに、地元史料による災害の生々しい様子を再構成することができ、それを論文として公表した。

第二には、仏教教団の歴史災害に対する救済活動を分析するための史料として、『明教新誌』の分析に着手し、キリスト教による救済活動に関する諸研究に加えて、それに対抗して組織された地震や水害の際の救済活動の多様な形を解明する手がかりを得た。この仏教系団体の雑誌の明治20-28年分の複写史料を得て、濃尾震災のみならず、明治20年代の災害の時代における災害実態と仏教系団体による救済・慈善事業についての知見を得ることができた。地震以外にも、この雑誌の明治20年代の災害記事を網羅的に収集して、災害対策上、近世から近代の過渡期である明治20年代の災害への社会意識をつかむ情報を得ることができた。また、明治20年代における『新愛知』・『岐阜日日新聞』・『大阪朝日新聞』などの新聞記事を収集し、災害報道に関する基礎資料とすることができた。

第三には、災害犠牲者の慰霊に関する研究を進め、愛知・岐阜両県下にフィールド調査によって、慰霊碑・記念碑を引き続き発見することができ、犠牲者の社会的慰霊について考察することができ、それを國學院大学で行われた慰霊をめぐるシンポジウムで報告し、それは報告書として刊行した。また、中国の中山大学で開催された国際シンポジウム「民間信仰と文化遺産」において、災害に対する日本社会の宗教的対応について報告を行い、また、広島大学における研究報告で近世から近代の災害記念碑・慰霊碑を中心に、18-19世紀の災害犠牲者への社会的慰霊と治水事業への取り組みについて総括的な報告を行うことができた。こうした研究を進める中で、明治期の災害犠牲者の慰霊の問題は、地震・水害といった災害だけではなく、近世・近代の飢饉犠牲者や流行病犠牲者の慰霊のあり方との比較が必要だと主張し、大量死と社会的慰霊にかんする包括的案研究が欠かせないことを課題として取りあげた。

第4に、救済に関しては地域社会における自治体の活動に加えて、仏教系諸団体の活動については『明教新誌』で多様なものがあったことを確認したが、こうした仏教系団体の活動の全般的な様相とともに、岐阜県下の地震の死者を慰霊する仏教施設（「記念堂」）が元僧侶で代議士の天野若円によって創建されたことから、この記念堂の調査も継続的に続けてきた。そして、この「記念堂」に関しては、現在も供養行為が継承されており、昨年が震災120周年を迎えて慰霊祭が挙

たこともあり、この供養行事に参列して慰霊行為の現状を調査することができた。そのなかで天野による記念堂創建事業やその後の維持の活動、仏教系団体の活動に関しての大量の史料が岐阜市立歴史博物館の寄託されていることを確認でき、担当の学芸員と協力して調査を本格化する基礎を作った。また、現在記念堂を管理し、慰霊活動の主催者でもある西村家ともコンタクトして、聞き取り調査をする準備を整えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①羽賀祥二「一八九一年濃尾地震と地域社会の動向—尾張北部・西部地域の被害と対応について—」(『名古屋大学文学部研究論集』57、2011年) 151-177、査読有
- ②羽賀祥二「1880～90年代における岐阜県中濃地域の被害について—『西白川村河岐島組文書』の紹介—」(『名古屋大学文学部研究論集』55、2009年) 16-32、査読無

[学会発表] (計3件)

- ①羽賀祥二「19世紀日本の記念碑文化」(広島史学研究会大会「歴史の中の記憶」2010年10月30日、広島大学)
- ②羽賀祥二「石造物文化と民間信仰—災害に対する日本社会の宗教的対応について—」(中山大学珠海国際シンポジウム「民間信仰と文化遺産」2009年8月8日、中山大学)
- ③羽賀祥二「戦争・災害の死者の〈慰霊〉〈供養〉—1890年代の東海地域を中心として—」(國學院大学研究開発推進センター・慰霊と追悼研究会シンポジウム、2009年2月14日、國學院大学)

[図書] (計1件)

- ①阪本是丸、羽賀祥二他『靈魂・慰霊・顕彰—死者への記憶装置—』(共著、錦正社、2010年、352p)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

羽賀 祥二 (HAGA SHOJI)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30127120

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし